

小泉《シュレスヴィヒ・ホルシュタイン》ひより Schlachtschiff Koizumi-SCHLESWIG-HOLSTEIN-Hiyori,KM

Marron「秋桜の空に」小泉ひより

■開幕

1939年9月1日の朝まだき、午前4時45分、ダンツィヒ港に砲声が轟いた。先月から停泊している 小泉《シュレスヴィヒ・ホルシュタイン》ひより が、港を扼するヴェスタープラッテ要塞に砲撃を加えたのである。ここに第2次世界大戦の幕が開いた。孤立無援の要塞など 小泉《シュレスヴィヒ・ホルシュタイン》ひより の28センチ主砲の砲撃によって鎧袖一触……の、筈である。

■概要

小泉《シュレスヴィヒ・ホルシュタイン》ひより は第1次世界大戦前に建造された前ド級のドイッチュラント 級戦艦である。ドイツにおける最後の前ド級戦艦のグループに属している。皇帝ヴィルヘルム二世の意向で発せられた第二次艦隊法に基づき、1906年から翌年にかけて ドイッチュラント 級5隻の戦艦が竣工した。衝角をもった平甲板型の船体に、背の高い檣楼と低く小さい艦橋、煙突は3本、28センチ連装砲2基を前後に振り分けている。船体長に比して艦幅が広く、魅惑的な尻を持つ安産型。ブラウンシュバイク 級の改良型であり、前ド級戦艦としてはスタイルも良く、極めて有力な戦艦である。しかし1906年には英国で ドレッドノート が竣工しており、すでにド級戦艦の時代が始まっていた。小泉《シュレスヴィヒ・ホルシュタイン》ひより は完成した時点ですでに旧式化していたのであり、ために活躍の場を与えられなかった。

■輝かざる戦歴

殷々と砲声が轟き、濛々と爆煙がたなびく。史上最大と言われる海戦の一つ、1916年5月31日から翌6月1日の第1次ジュットランド海戦に、小泉《シュレスヴィヒ・ホルシュタイン》ひより の居場所はなかった。学生にとっての学園祭と同じく、戦艦にとって晴れ舞台ともいえる海戦だが、小泉《シュレスヴィヒ・ホルシュタイン》ひより も第2戦隊第4戦艦隊の一員として「くしゅー」と蒸気を吹き上げながら、ラインハルト・シェア高海艦隊司令長官の総旗艦フリードリヒ・デア・グロッセ を懸命に追いかけている。しかしレシプロ機関の前ド級は18ノット以上出せない鈍足で、高速の高海艦隊主力部隊は鈍くさい 小泉《シュレスヴィヒ・ホルシュタイン》ひより らに合わせて行動せざるを得ず、はっきりいって足手まとい以外の何者でもなかった。そのため辛くも間に合ったとはいえ、デヴィッド・ビーティとヒュー・エヴァン＝トマスの戦隊の攻撃でフランツ・フォン・ヒッパーの巡洋戦艦戦隊が壊滅の危機に陥っている（注1）。前身部隊と主力部隊との間隙が開きすぎていたのだ。さらには、第2戦隊の噴き上げる黒々とした煤煙で主力の位置を暴露してしまっている。高海艦隊主力が出現したと見るや、ビーティは敵艦隊を大艦隊主力へと誘引すべく南進から北進へと回頭している。ドイツ艦隊は各個撃破のチャンス逃してしまった（注2）。ドイツ戦艦の大半は石炭専焼で、炭油混焼はケーニヒ 級以後の新鋭艦ばかりという状況だった。ドイツ炭はウェールズ炭に比べて発熱量が小さく、灰分も多く、軟らかくて塊が小さい。従って同一出力を出すにはより多く缶に投じなければならず、それに伴って灰が蓄積して発熱が減り、それを補うためにさらに多く投炭して、火夫の疲労もいや増すという悪循環だった。これでは長時間の高速運転などできず、ドイツ艦隊は戦闘が長引くほどに不利になるのである。ドイツの燃料事情による欠陥だったのだが、それを上層部は無視してお荷物な第2戦隊に怒りまくっている。多大な煤煙は主砲射撃の邪魔であり、

反転してヤード湾に戻ろうにも立ち上る煙を目当てに追撃されてしまっているのだ。帰還のための盾にしようにも、低速でその役に立たず、シェアは被害甚大なヒッパー戦隊残余に突撃を命じなければならなかった。海戦のその後の展開においても 小泉《シュレスヴィヒ・ホルシュタイン》ひより はまるっきり役に立たず、英国大艦隊にいじめられて逃げ回るのみだった。あげくに先行する主力を追っていた姉妹艦の ポンメルン が英駆逐艦の雷撃で沈められてしまっている。結局、第1次世界大戦において 小泉《シュレスヴィヒ・ホルシュタイン》ひより は能力不足で用をなさず、1917年8月には戦艦としての任務を解除されてしまっている。ヴィルヘルムスハーフェンに籠もって、激しく燃えさかるキャンプ・ファイヤーの炎を眺めているよりなかった。彼女に青春の輝きは与えられなかったのだ。

パリに迫ったドイツ軍が餓えと弾薬不足で自壊し、キール軍港でも戦艦 プリンツレгент・ルイトポルト の水兵が反乱を起こした。誰しもが戦争に倦んでいたのだ。革命が起こり、皇帝ヴィルヘルム2世がオランダに亡命してドイツ帝国は瓦解した。第1次世界大戦の終結後、ベルサイユ体制下でドイツが保有を認められた戦艦は前ド級の6隻のみである。小泉《シュレスヴィヒ・ホルシュタイン》ひより は戦艦に復帰してドイツ海軍の中心となったが、戦間期ということもあって目立った活躍は無い。この時期に前檣を測距塔に換え、缶も炭油混焼缶へ換装している。煙突は2本となった。そしてヒトラー政権の再軍備宣言と共に新鋭艦艇の建造が開始され、小泉《シュレスヴィヒ・ホルシュタイン》ひより は僚艦 シュレージエン と共に教育実習生（練習艦）となった。1939年8月、小泉《シュレスヴィヒ・ホルシュタイン》ひより は、第1次世界大戦で沈んだ巡洋艦 マグデブルク 追悼式典に参加するため、ダンツィヒに停泊した。すでにヒトラーは作戦「白の場合」の発動を命じている。彼女の砲撃を合図に、ドイツ軍はポーランド領内に進撃するのである。

■開幕の続き

孤立無援の筈だが、ヴェスタープラッテ要塞とダンツィヒ市内のポーランド軍は頑強に抵抗した。ドイツ軍も警察部隊やSS義勇兵、SAなどの二線級部隊を投入しているため攻略は遅々として進まない。中央郵便局を巡る攻防では、逆襲を喰らってドイツ部隊が敗走している。一日に30メートルも進めれば良いほうという惨状だった。支援砲撃にあたる 小泉《シュレスヴィヒ・ホルシュタイン》ひより も、あさっての方向を砲撃したり、間違えて空砲を撃ったり、カンペを見ながら砲撃指示を出したり、副砲砲員が砲弾を抱えて右往左往したりと、フランスの誇る「ぼんこつ戦艦」早坂《サヴォア》日和 に勝るとも劣らぬ（艦齢を考えれば、こちらの方がひどいかもしい）粗忽ぶりを発揮している。彼女の参加は見かけが結構強そうなので攻略部隊に大歓迎されたのだが、支援砲撃のあまりのひどさに、支援される側の方が疲労困憊している。

結局、9月7日午前にヴェスタープラッテ要塞のポーランド軍はドイツ軍に投降したのだが、薬品と飲料水の不足が降伏の主な理由であった。ダンツィヒ攻略部隊は海軍の水雷艇に空軍のJu87や北方軍からの増援を受けて、ようやくダンツィヒ制圧に成功したのである。後の熾烈な戦闘からすれば教育実習というしかない戦いで、小泉《シュレスヴィヒ・ホルシュタイン》ひより が任務を果たしきったかどうかは、かなり疑問であると言わざるを得ない。彼女は「くしゅー」と大きく凹んでいる。ダンツィヒ攻略以後は、バルト海で練習航海や部隊輸送など、出し物の裏方をはりきって務めていた。しかし、ドイツ海軍の主力は戦艦 木ノ下《シャルンホルスト》留美、榎本《グナイゼナウ》つかさ、日野森《ビスマルク》あずさ に、仮装航空巡洋艦（軽空母）愛沢《シャルンホルスト》ともみ といった若い艦であり、小泉《シュレスヴィヒ・ホルシュタイン》ひより は彼女たちを補助する立場だった。その活躍を見つめる瞳に、ふと寂しさがよぎっていた。

■演習戦隊～輝かしき日々～

練習戦艦として変わらぬ日々を送る 小泉《シュレスヴィヒ・ホルシュタイン》ひより が、輝く時がやってきた。二週間だけのシンデレラではあるにしても、彼女は確かに輝いたのである。

1949年2月10日。日英米枢軸軍が未曾有の戦力でもってパナマに殺到した。この時、ドイツ太平洋軍団（フォン・ニミッツ）は、新沢《シュレージェン》雅臣 艦長らの警告もあってある程度の警戒はしていたのだが、敵戦力は予想を遙かに越えるものであった。演劇を公演する教室に入りきらないほどの客が押し寄せたのである。整理券を配りたいところではあるが、そんな酔狂をしている暇は無かった。太平洋艦隊主力は南米諸国海軍とパナマ湾から離れて共同演習の真っ最中であつた。政治的効果を上げるべく、各国の大統領ら首脳を旗艦に乗せている。

ドイツは装甲巡洋艦 新沢《シュレージェン》雅臣 を旗艦に、M級軽巡 佐久間《マインツ》晴姫、野々宮《コルベルク》美影、小泉《アウグスブルク》鞠音、水雷艇 楠《T1》若菜と姉倉《T22》子鹿 からなる。アルゼンチンからはD級戦艦 リバダヴィア に重巡 ヴェインティシンコ・デ・マヨ、ラ・アルヘンティナ。ブラジルはD級戦艦 ミーナ・ジェライス。チリは超D級戦艦 アルミランテ・ラトーレ。あとは各国の駆逐艦。そこに 小泉《シュレスヴィヒ・ホルシュタイン》ひより も加わっていた。親善航海の一環として練習生を乗せてパナマを訪問していたのである。敵の攻撃が近々加えられるだろう場所に、わざわざ練習戦艦を差し向ける莫迦はいない。ドイツは日英米枢軸の攻勢計画に気づいていなかったのだ。本来ならばドイツ艦隊は敵戦隊にむけて突撃すべきであつた。しかし、この場合は乗艦している各国首脳の安全を優先しなければならない。楠《T1》若菜 の水上搜索レーダーに映った敵艦艇の数は、黒山の人だかりというべき数だった。新沢《シュレージェン》雅臣 艦長レーンホルム大佐は独断での撤退を決めた（注3）。小泉《アウグスブルク》鞠音 を先頭にM級軽巡3隻で雁行隊形をつくり、その後方に 小泉《シュレスヴィヒ・ホルシュタイン》ひより と姉倉《T22》子鹿、中央に南米各国艦艇をまとめ、殿艦として新沢《シュレージェン》雅臣 が 楠《T1》若菜 と共に付いた。太平洋艦隊司令部へは事後報告した。フォン・ニミッツ中將は承諾の証として、共同演習を続行するよう命令を与えた。そして最先任士官である、小泉《シュレスヴィヒ・ホルシュタイン》ひより 艦長クラインブルン大佐を指揮官に選択したのである。小泉《シュレスヴィヒ・ホルシュタイン》ひより は「くしゅふいふ」と奮い立った。クラインブルン演習戦隊の名称も与えられている。教育実習生ではあるが、一つのクラスを任されたのだ。なんとしても演習を成功させなければ。とはいえ、その実態は少々（どころでなく）情けないものだった。レシプロ機関のため航続力が少なく、新沢《シュレージェン》雅臣 から燃料を分けてもらわねばならなかったし、姉倉《T22》子鹿 と組んでの襲撃訓練では目標である新沢《シュレージェン》雅臣 に作戦を見透かされてしまっていた。新沢《シュレージェン》雅臣 にしてみればいい迷惑だったが、律気にもきちんと付き合っている。2週間という短い期間ではあったが、旗艦として 小泉《シュレスヴィヒ・ホルシュタイン》ひより は懸命に指示を出し続け、一隻の脱落もなくホーン岬回航を成し遂げた。最後には旗艦振りも板に付いたものとなっていた。そしてエミール・クラインブルン艦長は、最後には実弟の 小泉《アウグスブルク》鞠音 艦長マルクス・クラインブルン中佐との和解も勝ち得たのである。彼女を補佐した新沢《シュレージェン》雅臣 の苦労は相当なものであった。けれども彼女の精勤ぶりに感銘を受けて、再会を約して別れたのだった。それから 小泉《シュレスヴィヒ・ホルシュタイン》ひより は、バルト海から出ることはなくなったが、教育者としての務めを果たし続けた。彼女の教育によって一人前になった海軍士官は数多い。日英米海軍との熾烈な消耗戦を戦ったドイツ海軍にとって、小泉《シュレスヴィヒ・ホルシュタイン》ひより の功績は大きいものがある。ホーン岬回航から数年後、戦火の絶えた大西洋を、小泉《シュレスヴィヒ・ホルシュタイン》ひより は姉倉《T22》子鹿 と共に西へ渡った。アメリカ連合（東部連合）との親善が目的である。小

さかった 姉倉《T 2 2》子鹿 も今では立派な小型駆逐艦となって、先生の護衛を買って出ている。 ニューヨーク沖合には懐かしい顔ぶれが揃っていた。 桜橋《ロートリンゲン》涼香、佐久間《マイッツ》晴姫、野々宮《コルベルク》美影、小泉《アウグスブルク》鞠音、植《T 1》若菜。そして、あの時彼女を励まし、支えてくれた艦の姿もあった。 小泉《シュレスヴィヒ・ホルシュタイン》ひより は、新沢《シュレージェン》雅臣 との再会を果たしたのである。注1：ビーティの英巡洋戦艦部隊は、ヒッパー率いるドイツ巡洋戦艦部隊の痛撃を浴びて殲滅されかかっていた。その危機を救ったのが、急行してきた 篠塚《金剛》弥生 級4隻36センチ砲32門による統一射撃である。さらにQE級4隻と 扶桑 からなるエヴァン＝トマスの第5戦艦戦隊本隊が到着し、ヒッパー戦隊を一方向的に打ちのめした。注2：シェアの本隊が出現後、今度は第5戦艦戦隊の 結城《ウォースパイト》紗夜 と 扶桑 がめちゃくちゃに叩かれ、結城《ウォースパイト》紗夜 は生還したものの 扶桑 は爆沈している。英国もまた前身部隊と主力部隊との距離が開きすぎて、各個撃破の危機にさらされたのである。注3：当然ヒトラーは怒り狂ったが、南米各国からの感謝状や勲章などが届けられて、ひとまずは怒りを収めている。日英が合衆国を先頭にパナマを奪取しようとしたことは、南米各国を親独中立へと押しやる結果となった。しかし、枢軸軍の大戦力を見せつけられた為、ドイツがマルビナス（フォークランド）を租借する話しは消滅した。

■ 要目

- ・全長 127.6メートル
- ・全幅 22.2メートル
- ・主機 3段膨張式レシプロ3軸
- ・主缶 水管缶12基
- ・機関出力 20000hp
- ・最大速力 18kt
- ・航続力 4800海里(12kt)
- ・基準排水量 13191トン

■ 兵装

- ・(新造時)
 - ・主砲 28センチ連装砲2基
 - ・中間砲 17センチ単装砲14基
 - ・副砲 8.8センチ単装砲20基
 - ・機関砲 37ミリ機関砲4基
 - ・雷装 45センチ水中発射管6門
- ・(改装後)
 - ・主砲 28センチ連装砲2基
 - ・副砲 10.5センチ単装砲4基
 - ・機銃 多数

■ 装甲

- ・舷側 240ミリ
- ・甲板 67ミリ
- ・主砲 280ミリ

■ 同級艦

- ・ドイッチュラント 1917年兵装撤去 1922年解体

- ・ ハノーヴァー 1945年解体
- ・ ボンメルン 1916年沈没
- ・ シュレージェン 1945年触雷沈没
- ・ 小泉《シュレスヴィヒ・ホルシュタイン》ひより 1908.01.15竣工 1960年解体